いつか、一緒に

RAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつか、一緒に

【Ｎコード】
Ｎ４９４３Ｉ

【作者名】
ＲＡＮ

【あらすじ】
気ままに旅をする恋人。
私は、ただ彼が、嬉しそうにお土産話を持って帰ってくるのを待っているだけ。
そんなある日、彼からメールが届いた。

※サイト、ｄノベ転載

今日は休日。
私は朝御飯のために、フライパンに卵を落としたところだった。
携帯電話の着信音が鳴る。この音はメールだ。
こんな朝早く、というかだいたい非常識な時間に電話が鳴る時の相手は決まっていた。
私は、携帯電話を開き、メールの相手を確認する。
そこには予想通りの名前があった。
年中、色々な所を自転車で旅して回っている恋人からのものだった。
タイトルのないメールを開いてみると、「きれいだろ！」というメッセージとともに、写真が添付されていた。
そこには、広がる海、それを輝かせる太陽が写っていた。
私は思わず口がほころび、笑みを浮かべていた。
そして、すぐに浩二に電話をかけた。

「はい」
久しぶりに聞く声が電話から聞こえた。

「何？　この写真？」
他にもっと言い方があるだろうに、ついつい悪い言い方をしてしまうのは私の癖だ。
それでも、はずんだ声は隠せない。
きっと彼もそれはわかっていると思う。
「あ、見た？　俺今高知にいるんだけどな、国道走ってたらきれいだったから見せようと思って」
彼の声は、いつものように明るかった。
彼の元気な声が聞けるだけで私は嬉しかった。そして、安心して

いた。
「うん、そうね。ありがとう」
言葉は少ないが、私は精一杯声に気持ちをこめたつもりだ。
この嬉しい気持ちを、言葉に表現できないから。
「……いつか、二人で見たいと思って」
彼が少し小さな声で言った。照れているように聞こえたのは気のせいではないと思う。
私は思わず言葉につまってしまった。
私は嬉しすぎて、なんだか目頭が熱くなってきていた。
「……そうだね」
思わず、泣きそうな声で言ってしまって、少し恥ずかしかった。
「……なぁ……」
彼もその声を受けて、急に声のトーンを落として、何か言おうとしたが、私は声を出した。

「全く、そろそろ顔見せに帰ってきなさいよ。一人で楽しいことばっかりしてずるいんだから」
できる限り明るい声を出したつもりだった。
彼がどう感じたかはわからないが、彼の笑い声から、私の言葉に苦笑いを浮かべているような雰囲気はわかった。
「近いうちに帰るつもりだよ。ちょっとお遍路さんの道のりを走ってみてたんだけど、もうすぐ終わる。またお金を稼がないと」
彼も明るい調子で返してきた。どうやらいつもの調子に戻してくれたようだ。
「お遍路さんの道のりって……。大変じゃないの？」
私は呆れた声をあげる。
確かにおもしろそうだとは私も思ったが、本当の目的は修行であるのだから、その道のりは険しい。
それを軽々しく、走ってみた、などとよく言えたものだ。
「だから全部走るのは辛いから、いいトコ取りして走ってたんだよ」

「何それ。お遍路さんに失礼じゃないの」
「いや、そういうのもありらしいよ」
「あぁ、そう。……それより、帰るのはいつぐらいになるの？」
「はっきりとは言えないんだよね。……じゃあ、目標三週間以内」
「また怪しい目標を……」
今度は私が思わず苦笑いを浮かべた。
彼はごまかすように、あはは、と笑った。
「まぁ、帰ってきたら連絡ちょうだい。……待ってるから」
「うん。ありがとう」
「それじゃ、気をつけてね」
私はそのまま電話を切った。
そして、携帯電話を閉じるが、しばらく携帯電話を握り締めていた。
彼の声が今まで響いていた携帯電話に、彼の温もりがあるような気がして。

あと、三週間。
とりあえず彼の言葉を信じて、三週間後を楽しみにすることにした。
ふと、妙な匂いがするのに気づいて、あることを思い出した。
目玉焼きをほったらかしにしてしまっていた。

（後書き）

何かのＣＭで旅して、ケータイで写真撮ってるのを見て、思いつきました。
結構いい感じにまとまってくれたかな、と個人的には気に入ってます。
オフ時では名前つけてたんですが、やっぱりやめとこうとなくしました。
名前つけると、どうしても愛着わいてしまうので。
ちょっとこの二人はまだどうなるかわからないので。
実は目玉焼きのところは、オチに困ったから、というのは内緒で（え）。
ちなみに、お遍路さんとか、高知とかはテキトーに言ってます（最悪）。
信じないでください（ちゃんとしろよ）。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4943i/

いつか、一緒に

2011年5月31日12時45分発行